

仙台市文化財調査報告書第157集

# 杉土手・北前遺跡

——杉土手(2次)・北前遺跡(4次)  
発掘調査報告書——

1992年3月

沼田達雄  
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第157集

# 杉土手・北前遺跡

——杉土手(2次)・北前遺跡(4次)  
発掘調査報告書——

1992年3月

沼田達雄  
仙台市教育委員会

## 序

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しましては、多大なご協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

本市の南縁を流れております名取川沿いには数多くの埋蔵文化財が包蔵され、随所にその分布をみることができます。なかでも山田地区付近は前期旧石器の発見と縄文時代の大集落跡で注目されました山田上ノ台遺跡などをはじめとしまして、著名な遺跡が密集しているところでもあります。

今回の調査対象遺跡であります北前遺跡も、山田上ノ台遺跡と同様に前期旧石器が発見されたところとして知られてきました。また、縄文時代の早期にさかのぼる貴重な集落跡が発見されたところでもあります。この北前遺跡にはまた、江戸時代に築かれたと考えられております杉土手がよく保存されています。この杉土手はかつては6 kmにもわたって延々と続いていたようですが、現在ではわずかにその一部だけが姿をとどめておりまして、たいへん貴重な文化財でもあります。

今回はこのような北前遺跡と杉土手の一画を調査いたしまして、これまでの調査成果にさらに新しい知見を加えることができました。本書はそうした調査成果をまとめたものでありますが、調査にあたりましては多くの方々のご協力やご指導をいただきました。心から敬意と感謝を申し上げます。

1992年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

# 本文目次

序文

例言

I 調査に至る経過	1
II 調査要項	1
III 遺跡の位置と環境	2
IV 遺跡の概要と調査方法	4
V 杉土手の調査	6
VI 杉土手下層（北前遺跡）の調査	12
VII まとめ	15

## 例言

1. 本書は、宅地造成に関わる杉土手および北前遺跡の発掘調査報告書である。  
(杉土手については昭和61年(1986年)の調査を第1次調査とし、今回の調査を第2次調査とする。)
2. 出土遺物の整理と報告書作成は太田昭夫が担当し、報告書の執筆はIを田中則和が、その他を太田が行い、編集は太田が行った。
3. 図中および本文中使用の方位の北(N)は、すべて真北である。
4. 本書における土色については『新版標準土色帳』(小山・竹原:1973)を使用した。
5. 本書使用の地図は、国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」である。
6. 本書における出土遺物・実測図・写真等の資料は仙台市教育委員会が一括保管している。

## I. 調査に至る経過

平成2年10月19日付で仙台市泉区将監二丁目18-1 沼田達雄氏より仙台市太白区山田北前町1045-1所在の杉土手・北前遺跡の発掘届が提出された。

仙台市教育委員会は申請者の沼田達雄氏と協議を行った。当該地には宅地造成工事が予定されており、工事が実施されると杉土手の上部が削平され、敷地の南と北の境界際は擁壁工事により北前遺跡の地下遺構が破壊される可能性が判明した。協議の結果、当該地の保存は困難であるため、事前に発掘調査を実施することとした。

## II. 調査要項

遺 跡 名：杉土手（C-525）・北前遺跡（C-131）

遺 跡 所 在 地：仙台市太白区山田北前町（今回の調査地点は北前町1045-1）

調 査 期 間：平成3年7月15日～8月13日

調査対象面積：258㎡

調 査 面 積：47.5㎡

調 査 主 体：仙台市教育委員会

調 査 担 当：仙台市教育委員会文化財課

教諭 太田昭夫

調 査 参 加 者：砂金正男 高橋たづよ 早川裕子 三浦きよの 森 金三 森 ミヨノ

山田やす子（調査）

大槻京子 大山のり子 菅井民子 森 みほ子 米倉節子（整理）

調 査 協 力：沼田健治 鈴木初男

ヨシケイ仙南事業部 仙健工業 仙台市山田市民センター

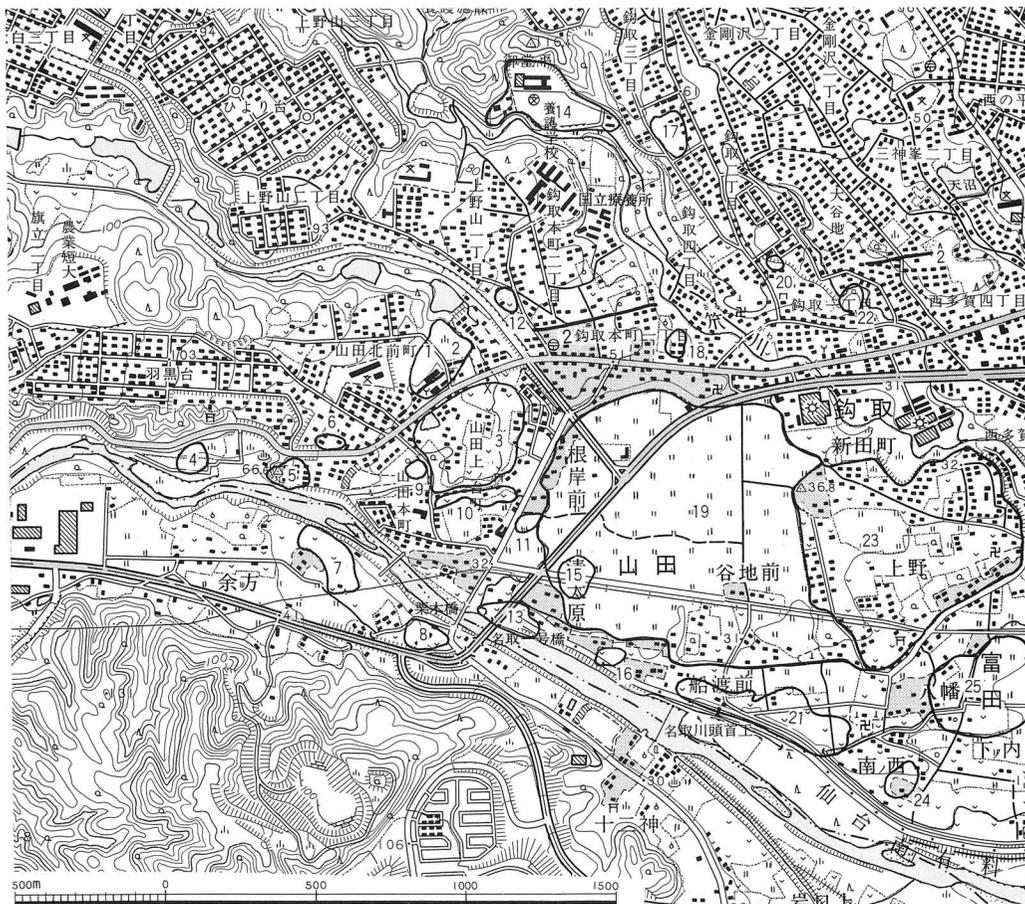
### III. 遺跡の位置と環境

**位置：**今回の調査対象地点の杉土手および北前遺跡は仙台市太白区山田北前町地内に所在する。この地点は仙台市の南東部にあたり、仙台市中心部から南西約6 kmのところである。遺跡の南側には国道286号線が東西に走っており、また周辺には住宅地が広範に広がっている。

**自然環境：**奥羽山脈に源を発する名取川は、陸前丘陵と呼称される丘陵群の中を開析しながら東流し、その丘陵東端部の山田地区付近からは宮城野海岸平野と呼ばれる沖積地を横切るように流下し、太平洋に注いでいる。北前遺跡はこの名取川の谷口部にあり、名取川北岸の丘陵の麓に立地している。特にこの谷口部の北岸一帯には段丘の発達が顕著にみられ、これらは標高の高いほうから台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘の4段丘の区分がなされている（地団研仙台支部：1980）。北前遺跡はこの中の上町段丘面上に立地しており、<sup>註</sup>標高は60～70mで、同じく上町段丘上に立地する山田上ノ台遺跡に向かって緩やかに傾斜している。また、遺跡の北から東側にかけては深い谷や沢が入り込んでおり、東方の段丘面とを分断している。

**歴史的環境：**周辺の段丘面上には数多くの遺跡の分布が認められる。これらは縄文時代と平安時代に属する遺跡が多く、東方の沖積地と比較して弥生時代と古墳時代に属する遺跡の比率が少ないのが特徴である。著名な遺跡としては南に隣接する山田上ノ台遺跡がある。ここは日本の前期旧石器時代の存在を初めて証明した遺跡として、また縄文時代中期の大集落跡として知られている（主浜他：1987）。前者の調査はその後、北前遺跡においても同様の文化層の発見に引き継がれていった（佐藤他：1982）。両遺跡の旧石器時代の基本層はほぼ共通しており、上部は途中に川崎スコリア層を挟む火山灰層から、その下部は水成堆積物からそれぞれ成っている。そして、川崎スコリア層の下層から前期旧石器が発見されている。また、平安時代の遺跡としては御堂平遺跡がある。この遺跡は小河川沿いのやや奥まった所にあり、礎石建物跡などが検出されている。地名なども加えて、仏堂としての正確が考えられているところである（斎藤・佐々木：1983）。江戸時代になると奥州街道の整備に伴い、江戸への1番目の宿駅として長町宿が設置された。そして、脇街道としてそこから西へは二口越出羽街道と笹谷街道が整備され、遺跡付近には旅人のための宿が設けられたことが知られている。このように江戸時代になると遺跡付近は街道沿いとしての新たな性格が生まれてきたようである。

**註：**北前遺跡や山田上ノ台遺跡に立地する段丘面については以前から上町段丘面に比定する説（中川他：1960・1961）と台ノ原段丘面に比定する説（中田他：1976）があったが、最近ではこの段丘面が約3万年前ごろには段丘化していたこと（主浜他：1987の豊島氏論文）、段丘礫層中の花粉分析の組成が上町段丘構成層の組成とよく似ていること（及川他：1985の竹内氏論文）などから、ほぼ上町段丘に比定されている。



番号	遺跡名	立地	時代
1	北前	段丘	旧石器(前期・後期)・縄文(早期・前期・中期)・平安・江戸
2	鹿落土手(杉土手)	丘陵・段丘	江戸
3	山田上ノ台	段丘	旧石器(前期・後期)・縄文(早期・前期・中期・後期)・奈良・平安・近世
4	羽黒堂	段丘	縄文・奈良～平安
5	羽黒堂A	段丘	縄文・古墳・平安
6	羽黒堂B	段丘	縄文・古墳・平安
7	下中東	段丘	古墳・奈良～平安
8	余方	段丘	奈良～平安
9	山田上ノ台塚	段丘	
10	汚田通A	段丘	縄文・平安
11	汚田通B	段丘	平安
12	上野山	段丘	縄文
13	清田原西	段丘	縄文・平安
14	御堂平	丘陵斜面・段丘	縄文(中期)・平安・中世
15	竹の内前	段丘	奈良～平安
16	清田原東	段丘	縄文・平安
17	紙漉山	段丘	縄文
18	町	段丘	縄文・古墳・平安
19	山田桑里遺構	段丘	奈良?
20	後田	段丘	奈良～平安
21	船渡前	段丘	縄文(中期・後期)・弥生・奈良～平安
22	八幡	段丘	古墳・平安
23	上野	段丘	縄文(中期)・奈良・平安
24	富田南西	自然堤防	奈良～平安
25	南ノ東	自然堤防・後背湿地	弥生・平安

第1図 周辺の遺跡

## VI. 遺跡の概要と調査方法

今回の調査は杉土手では2次、北前遺跡では4次調査にあたる。ここではこれまでの両遺跡の調査概要についてまとめてみたい。

<杉土手>杉土手は「<sup>しよけ</sup>鹿除土手」とも呼ばれ、主に田畑を荒らす鹿や猪の侵入を防ぐ目的で築かれたものと考えられてきた。この土塁状の遺構は現在では部分的にしか遺存していないが、主に絵図や地名などから本来は国道286号線に沿った丘陵麓を約6kmにもわたって延々と築かれていたことが明らかになっている(小川他：1987)。調査では北前遺跡の第1次調査において一部の試掘が行われ、杉土手よりも新しい江戸時代後半ごろの溝が確認されている(佐藤他：1982)。また、北前遺跡の第2次調査に伴って杉土手の調査(第1次)も行われている(小川他：1987)。その地点は今回の地点の南西約100mのところであり、そこには長さ約125mの杉土手が現存していた。調査の結果、湿地部分は土手「堤」として、台地部分は本来の「鹿除土手」として機能していたものと考えられ、後者の杉土手ではまた2回の補修を経て3期にわたり使用されていることも確認されている。この杉土手の構築年代については明確ではないが、江戸時代中期以前にさかのぼる可能性が考えられている。

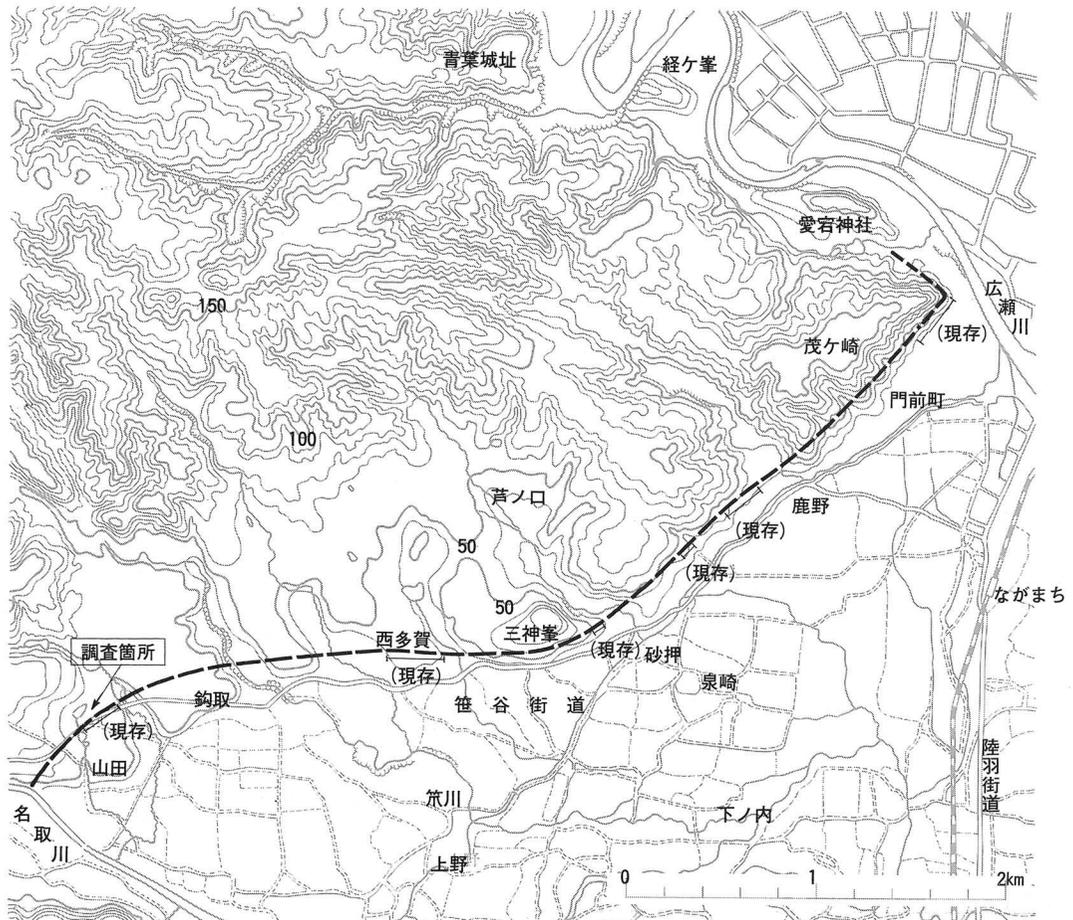
<北前遺跡>北前遺跡ではこれまで3回にわたり調査が行われている。その内、今回の調査地点に最も近い第1次調査では前述のように前期旧石器時代に属する石器群が川崎スコリア層の下層から発見されており、さらに上層からは後期旧石器時代に属する石器群も認められている。



第2図 遺跡周辺の地形と調査地点

また、縄文時代早期末の竪穴住居跡が8軒、中期後葉の竪穴住居跡が2軒発見されており、中でも早期末の集落跡は発見例が少なく、貴重な資料である。その他に平安時代と江戸時代の遺構も検出されている(佐藤他：1982)。第2次調査では杉土手の下層から平安時代とみられる須恵器窯跡1基と縄文時代のピットが1基検出されている。特に前者の窯跡はこの付近では初めての検出例である(小川他：1987)。第3次調査では縄文時代の中期末の竪穴住居跡が3軒と、主に縄文時代に属し、フラスコ状土坑を含む土坑が10数基検出されている。また、調査区内に沢状の地形が認められ、そこから数万年以前にさかのぼる植物遺体を含む層が確認されている(渡部：1989)。

今回の調査では前述したこれまでの調査知見に基づき、杉土手の調査では構築方法や構築年代をより明確にすること、下層の調査では主に縄文時代の遺構の広がりを確認することと、旧石器時代の文化層の存在を確認することなどを主なねらいとした。また、杉土手では今回の地点付近が極めて遺存状態が良好なことから、調査対象範囲だけでなく、その東側を含めて平面図を作成することにした。



第3図 杉土手全長(想定図) 大日本帝国陸地測量部明治38年測図同40年度発行「二万分之一」地形図より作成

## V. 杉土手の調査

### 1. 調査前の状況

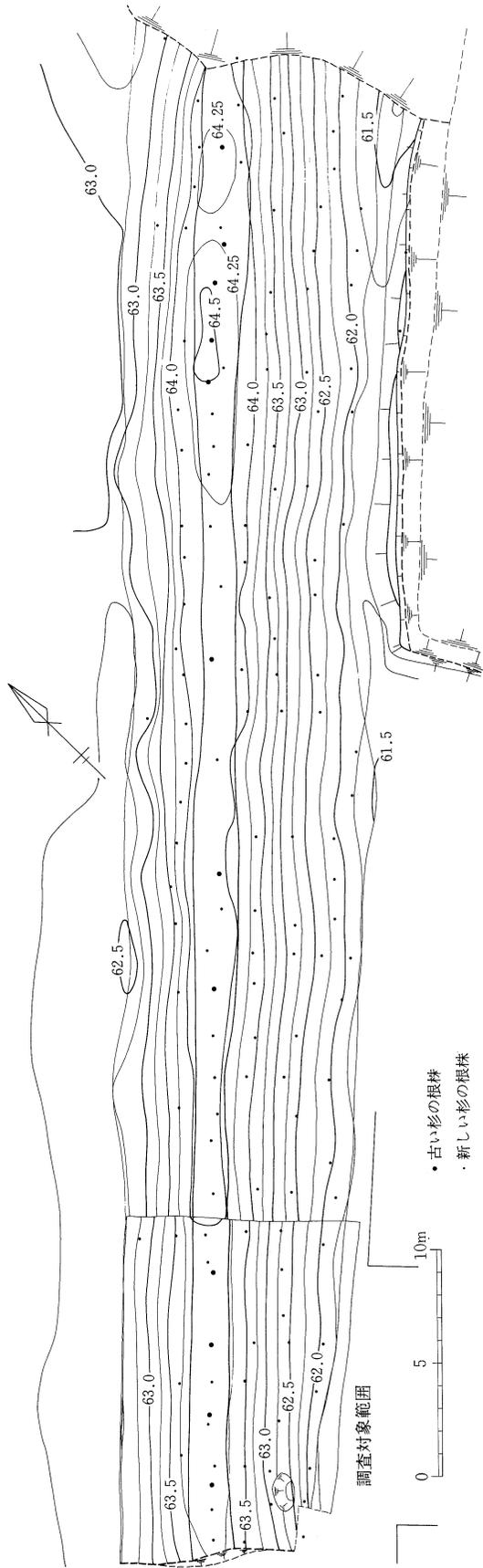
調査地点付近の杉土手は極めて遺存状況が良く、約70mの長さが現存している。その西側は本来は第1次調査地点まで続いていたようであるが、現在は道路や宅地により分断されている。また、沢や谷が入り込む東側では宅地造成などにより大きく失われている。現存する約70mの部分はほぼ南西から北東方向(N-46°-E)に直線的に走行する。その規模は頂面では幅約2m、基底部では幅約10~11mである。西半部についてはその南側裾部がわずかに削られているため、本来は幅11mの基底部を有していたものと考えられる。高さは北側現地表面からは約1.5m、南側現地表面からは2.30~2.70mであり、南側がより比高差が大きいことを示している。全体的には杉土手は周辺の地形の傾斜と同じように南西方向にわずかに高さを減じている。杉土手の縁辺付近には、北側ではわずかな凹み、南側では溝状の凹みが一部で確認される。これは積み土を採掘した痕跡とも考えられる。

杉土手の表面全体には新古2種類の杉の根株が100本以上認められた。その内、古い根株は朽ちかけてはいるが、多くが直径1m以上の大木であったことを示しており、これらは頂面にほぼ一直線状に2~3m間隔で植えられていたようである。こうした状況は第1次調査でも確認されており、この古株が2~300年以上も前までさかのぼる可能性も指摘されている。なお、新しい根株は最近伐採された杉であり、古株とは異なり全面に不規則に植えられている。

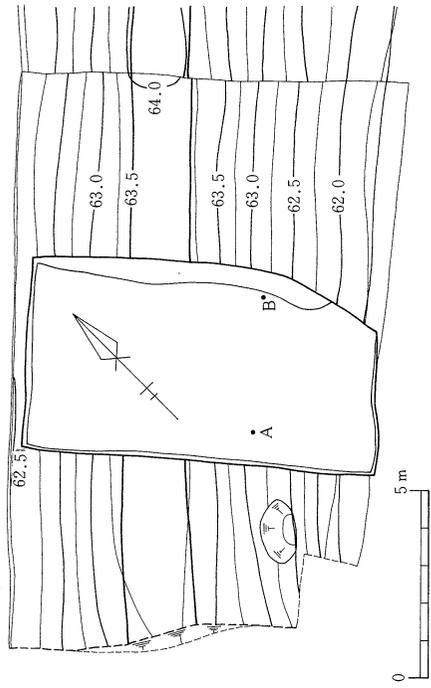
### 2. 調査の結果

調査は対象範囲のほぼ中央に杉土手と直角に幅5mのトレンチを設定し、断面からは積み土の状態を観察し、平面的には杉土手に伴う遺構などについて確認することにした。

<積み土>積み土は計45層確認された。また、その上部には積み土の崩落土と考えられる層が12層認められた。これらの積み土は層の傾きや層序関係から、大きく3ヶ所に積み手の違いが認められる。こうした状況は第1次調査でもCトレンチにおいて確認されており、積み手の違いは構築の時期差を示すものとされ、I~III期に分けられている。したがって、ここでも同様のことが考えられ、同じく古い段階よりI~III期と呼称して述べていきたい。I期の積み土は13層あり、杉土手以前の表土面にのっている。これらは基本層の黄褐色粘土ブロックを比較的多量に含む層から多くは成っている。層の傾きは大半は南側に下がっているが、これは北側から主に積み上げが行われたことを示すものかもしれない。II期の積み土は下部にはI期の崩落土があり、それに10数層の積み土がのっている。これらの積み土の状態はI期と同様であるが、層の傾きは北側に下がっている。III期の積み土はI・II期の北側と上部に認められた。積み土は少ないが、特に南側では崩落土が厚く堆積していることから、本来は高さもかなりあったも



第4図 杉土手平面図



第5図 調査対象範囲と調査区

(A-X = -197.74615km Y = +0.12315km)  
 (B-X = -197.74378km Y = +0.12585km)

のと推測される。

＜基底面の遺構と各期の規模＞杉土手の基底面（旧表土上面）において、北側では溝状遺構、南側では緩やかな段が確認された。溝状遺構は南西から北東方向(N-47°-E)に走行しており、その幅が約1.5mである。南辺は旧表土を切り、急斜面で底面に至るが、そこから北辺へは緩やかに移行しており、その北側では旧表土は確認できなかった。この溝状遺構については杉土手の方向に沿って走行していること、底面から南辺にかけての傾斜がそのままI期積み土に続くことなどから、I期構築時に伴う掘り込みと考えられる。同様の遺構は第1次調査でも確認されている。この遺構は、特に南辺が直線的であることからI期杉土手の北側の基準線としての機能と、掘り込むことによってより高さを増やし、合わせてその土を積み土として利用することなどを意図したものと考えられる。

これに対し南側の緩やかな段は規則性は認められず、南の方向に徐々に下がっている。杉土手に伴うものと考えられるが、どの段階に伴う掘り込みかは明らかではない。

各期の規模については次のようにまとめることができる。

I期：基底部幅-3.4m 頂面-0.8m 高さ-1.7m 法面の傾斜角度-両面とも約40°

II期：基底部幅-4.8m 頂面-2.4m 高さ-1.8m 法面の傾斜角度-両面とも約40°

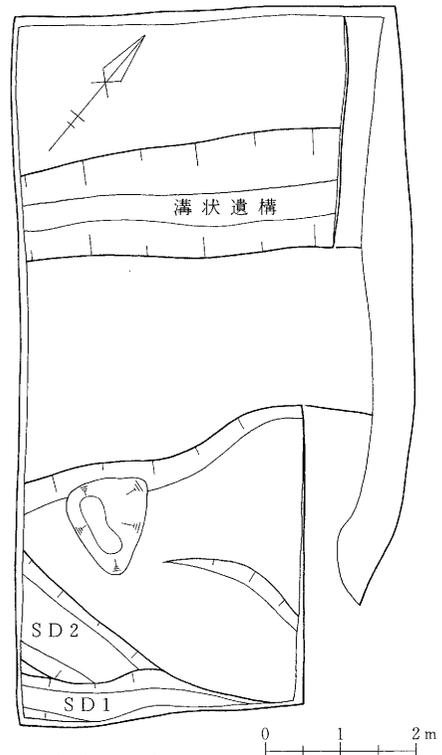
III期：基底部幅-6.0m 頂面-2.0m 高さ-2.0m 法面の傾斜角度-北が37° 南が約40°

#### ＜その他の遺構＞

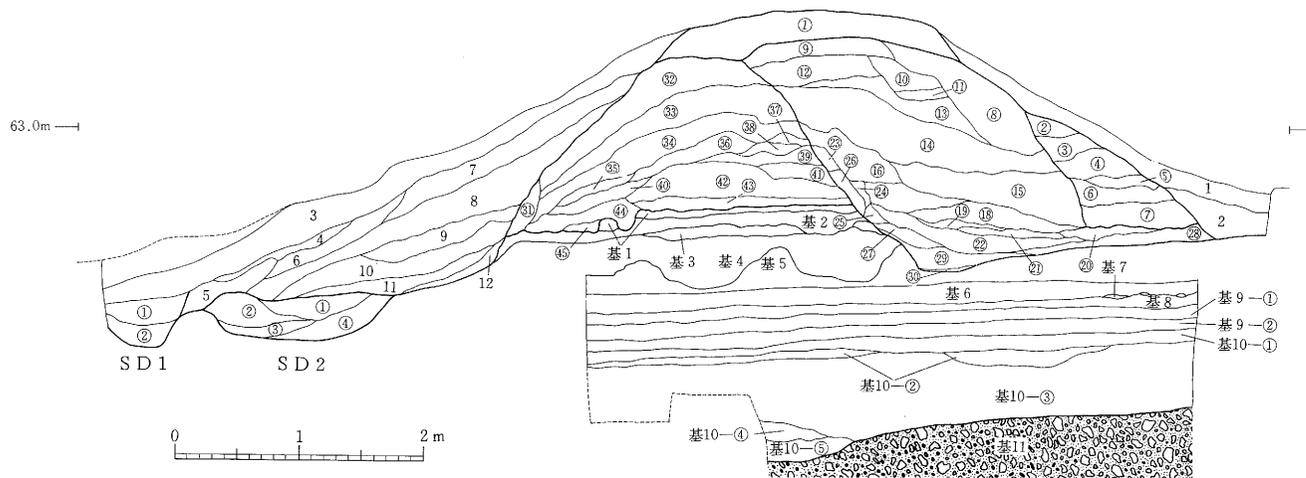
調査区の南側において溝跡が2条検出されている。いずれも杉土手に伴うものとは考えられない。第1溝跡(SD1)：調査区南端で検出された。南側上端は不明だが、溝幅は上端で約0.7m、深さは約40cmと考えられ、杉土手の方向よりはいく分東寄りに走行している。この溝跡は杉土手の崩落土を切っていることから、それよりは新しい遺構と考えられる。

第2溝跡(SD2)：杉土手南側の崩落土下面で検出された。溝幅は上端で約1.10m、深さは約30cmで、ほぼ東西方向に走行しており、東側はSD1に切られている。この溝跡は杉土手の方向とは全く一致しないこと、崩落土下面で検出されていることから、杉土手以前の遺構と考えられる。

なお、両溝跡とも北前遺跡の第1次調査で確認



第6図 杉土手調査区平面図



第7図 杉土手断面および基本層序

形成	No	土色	土性	備考
崩落土	1	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	しまりなし 植物の根が多く入りこむ。
	2	褐色 (7.5YR4/4)	シルト質粘土	しまりなし 植物の根が多く入りこむ。
	3	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	植物の根が多く入りこむ。
	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	しまりなし 層中に10YR5/8粘土粒多量に含む。
	5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりなし
	6	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりなし
	7	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりなし
	8	褐色 (10YR4/4)	シルト質粘土	しまりなし 10YR5/8粘土粒多く含む。
	9	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	しまりなし 10YR5/8粘土ブロック多く含む。
	10	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 10YR5/8粘土粒子わずかに含む。
	11	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりややあり 10YR5/8粘土粒多く含む。
	12	褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり 10YR5/8粘土ブロック含む。
I期	①	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりなし
	②	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりあり 黄褐色粘土粒子わずかに含む。
	③	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多く含む。
	④	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりなし
	⑤	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	しまりややあり
	⑥	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりなし
	⑦	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりややあり
II期	⑧	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子をわずかに含む。
	⑨	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子をわずかに含む。
	⑩	にぶい黄褐 (10YR4/3)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多く含む。
	⑪	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	しまりなし
	⑫	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし
	⑬	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	ややしまりあり
	⑭	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	しまりなし 黄褐色の粘土ブロックわずかに含む。
	⑮	褐色 (7.5YR4/3)	粘土質シルト	しまりあり 黄褐色のブロックと黒褐色シルトブロック含む。
	⑯	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし
	⑰	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりややあり 黄褐色のブロックと粒子含む。
	⑱	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりややあり 黄褐色の粘土粒子多く含む。
	⑲	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	しまりややあり
	⑳	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりなし
	㉑	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子を含む。
	㉒	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多く含む。
	㉓	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多く含む。
	㉔	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多く含む。
	㉕	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多く含む。
	㉖	黄褐色 (10YR5/6)	シルト質粘土	しまりなし 基本層のブロック
	㉗	暗褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多量に含む。
㉘	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	しまりややあり	
㉙	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多く含む。	
㉚	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	しまりややあり 黄褐色の粘土粒子を含む。	

形成	No	土色	土性	備考	
III期	㉛	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりなし	
	㉜	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし	
	㉝	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多量に含む。	
	㉞	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし	
	㉟	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 黄褐色粘土粒子含む。	
	㊱	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 黄褐色粘土ブロック、粒子及び無褐色のシルトブロックを含む。	
	㊲	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 黄褐色粘土ブロック、粒子及び無褐色のシルトブロックを含む。	
	㊳	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	しまりなし 黄褐色の粘土ブロック粒子多く含む。	
	㊴	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	しまりあり 黄褐色の粘土粒子多く含む。	
	㊵	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりなし	
	㊶	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりなし 黄褐色の粘土ブロック多量に含む。	
SD1	①	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし	
	②	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子を含む。	
	SD2	①	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子を含む。
		②	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりややあり 黄褐色の粘土粒子を含む。
		③	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりなし 黄褐色の粘土粒子多く含む。
		④	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	しまりなし 黄褐色の粘土ブロック粒子を多量に含む。
基本層	1	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	しまりややあり 杉土手以前の表土	
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト質粘土	しまりややあり	
	3	褐色 (7.5YR4/4)	シルト質粘土	しまりややあり	
	4	暗褐色 (10YR3/4)	粘土	しまりなし 層中に10YR4/4褐色ブロック多く含む。木の根による乱れか。	
	5	黄褐色 (10YR5/6)	シルト質粘土	比較的軟質、木の根の乱れが及んでいる。	
	6	黄褐色 (10YR5/6)	シルト質粘土	5層に比べしまりあり。1~2cmの礫をわずかに含む。	
	7	橙褐色 (7.5YR6/8)	砂質シルト	「川崎スコリア層」ブロック状に分布。	
	8	黄褐色 (10YR6/6)	シルト質粘土	しまりややあり 5層・6層に比べやや暗い。風化帯?	
	9-①	黄褐色 (10YR5/8)	粘土	しまりあり	
	9-②	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土	しまりあり	
	10-①	明黄褐色 (10YR6/8)	シルト質粘土	しまりあり マンガン下部にわずかに入る。5m前後の礫が全体的にまばらに入らる。石英粒混じる。	
層	9-③	明黄褐色 (10YR7/6)	シルト質粘土	しまりあり 7/4浅黄色 (粘土) のブロックが混じる。マンガン含む。	
	9-④	明黄褐色 (10YR7/6)	シルト質粘土	しまりあり 層上部にマンガン多く含む。下部は少ない。酸化斑含む (部分的に帯状)。	
	9-⑤	浅黄色 (10YR7/4)	粘土質シルト	しまりあり 5cm前後の風化礫多量に含む。	
	11	浅黄色 (2.5Y19/3)	粘土質シルト	しまりあり 礫わずかに含む (風化礫) マンガン斑含む。	
	11	浅黄色 (2.5Y7/4)	シルト	しまりあり 段丘礫層。礫は径5~10cm風化礫	

された杉土手を切っている溝跡とは規模や層位関係から無関係のものと考えられる。

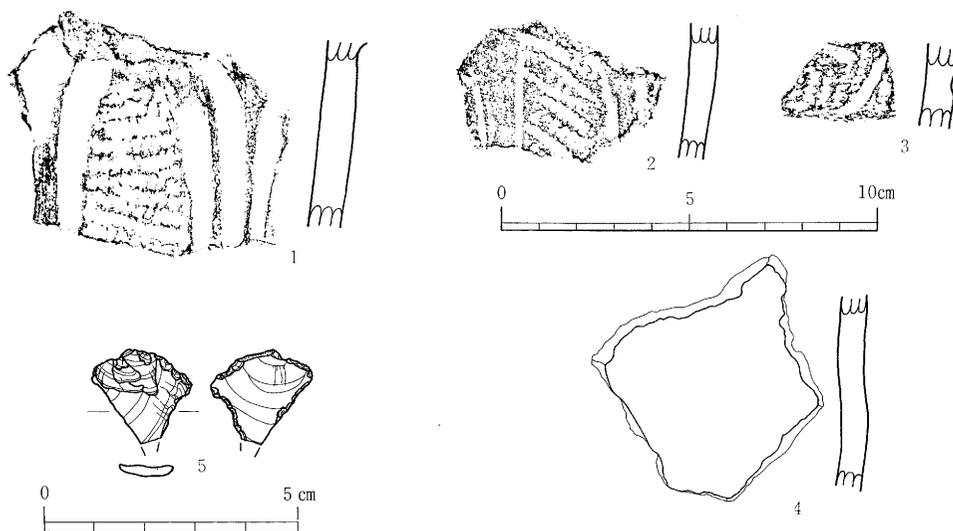
<出土遺物> (第8図、写真13)

表土や崩落土・積み土内からは縄文土器・土師器・石器が若干出土した。しかし、いずれも杉土手やその他の遺構に伴うものではない。

**縄文土器**：7点出土しているが、図示できたのは5点である。1は隆沈線により楕円文か懸垂文が描かれている。2は沈線により懸垂文とみられる文様が描かれている。これらは文様などの特徴から中期後葉の大木9式に比定されるものである。3は地文の上に沈線が描かれるもので、大木8bか9式に相当するものと考えられる。4は内外面とも無文の土器である。時期は不明である。写真13-5は深鉢の体部破片である。外面にはLR縄文が施文されている。植物繊維がわずかに含まれていることなどから前期初頭ごろのものと考えられる。

**土師器**：1点出土している(写真13-11)。内面が黒色処理されている甕の体部破片と考えられる。外面にはヘラケズリの調整痕が認められる。

**石器**：二次加工のある剝片が1点出土している(第8図5)。縦長の小形の剝片を素材とし、その縁辺に細かな二次加工が施されている。一端が欠けるが、石鏃か石錐の可能性も考えられる。その他に剝片(写真13-13)が1点出土している。



番号	種類	出土層位	特徴
1	縄文土器 深鉢	杉土手 積み土	外面は隆沈線による楕円文か懸垂文。区画内はR L縄文。
2	縄文土器 深鉢	杉土手 崩落土	外面は沈線による懸垂文か。区画内はL R縄文。
3	縄文土器 深鉢	〃	外面はR L縄文施文後、沈線による文様が描かれている。
4	縄文土器 深鉢	〃	内外面とも無文。調整は荒いミガキで、器面には凹凸あり。
5	石器 (二次加工のある剝片)	表土	一部欠損。縦長の剝片の縁辺に細かな二次加工が施されている。長さ(19mm) 幅19.5mm 厚さ2.6mm 石材-珪質頁岩。

第8図 出土遺物 (1)

## VI. 杉土手下層（北前遺跡）の調査

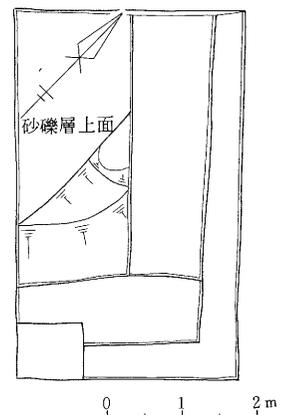
杉土手の下層は砂礫層上面まで調査を行ったが、遺構は発見されなかった。また、6層以下からは遺物の出土はみられなかった。ここでは基本層序と出土遺物について述べる。

### 1. 基本層序

杉土手下は11層の砂礫層に達するまで10層の基本層が認められた。

- 1層：黒褐色の粘土層シルトである。杉土手以前の表土で、他に比べて黒みが強い。
- 2層：暗褐色のシルト質粘土層である。縄文時代中期などの土器が出土している。
- 3層：褐色のシルト質粘土層である。縄文時代早期などの土器が出土している。
- 4層：暗褐色の粘土層である。層中には木の根が及んでおり、褐色のブロックを多く含んでいる。縄文時代早期と前期の土器が出土している。
- 5層：黄褐色のシルト質粘土（火山灰層）層である。比較的軟質で、下層に比べて粘性は弱い。木の根の攪乱が深く及んでおり、層上面の凹凸が著しい。環状石製品が層上面で出土している。
- 6層：黄褐色のシルト質粘土層（火山灰層）である。5層に比べて粘性が強く、層中には1～2cmの礫を含む。
- 7層：橙色の砂質シルト層で、「川崎スコリア層」である。全面には分布せず、ブロック状に挟在している。
- 8層：黄褐色のシルト質粘土層（火山灰層）である。風化帯の可能性もある。
- 9層：黄褐色の粘土層で、②は①よりやや明るい層である。この層は火山灰層か水成堆積層か不明である。
- 10層：水成堆積層を一括した。①～③は明黄褐色のシルト質粘土で、層中にはマンガン斑を含んでいる。④・⑤は浅黄色の粘土質シルト層で、層中に風化礫を含んでいる。
- 11層：砂礫層である。マトリックスは浅黄色のシルト層で、礫は径5～10cmの風化礫である。この上面は北側から徐々に、途中からは大きく南東方向に傾斜している。

以上の基本層の中で、4層までが縄文時代以降の堆積層である。しかし、遺物の出土状況でもわかるように、木の根の攪乱による層の乱れが大きく及んでいるようである。また、5層から砂礫層までの火山灰層および水成堆積層は旧石器時代の文化層が確認された第1次調査時の基本層序と基本的には共通しており、今回さらに北側へも同様の基本層が広がることが確認された。



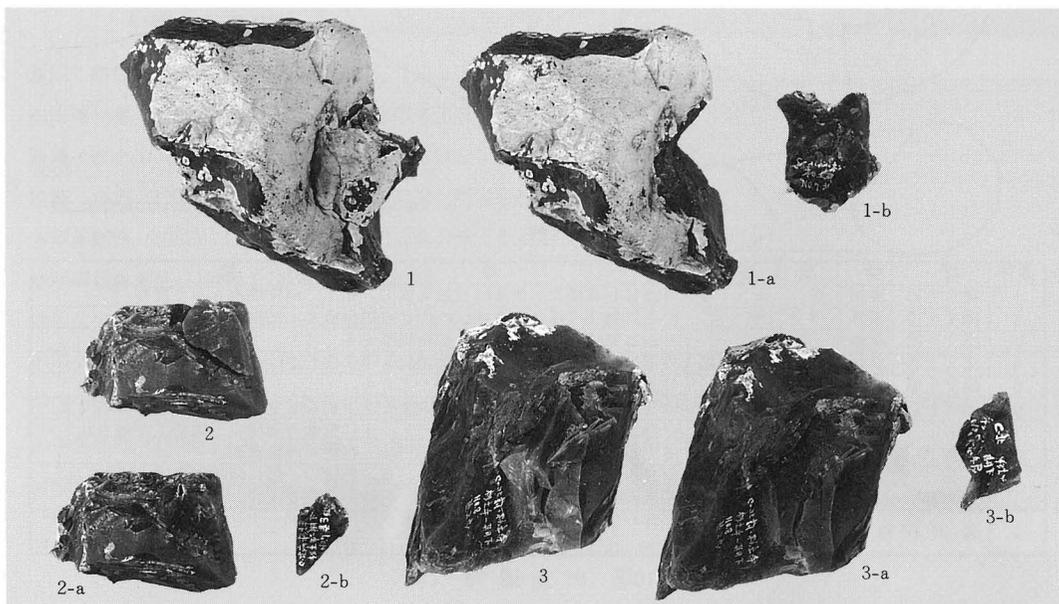
第9図 下層調査区平面図

## 2. 出土遺物 (第10図、写真13)

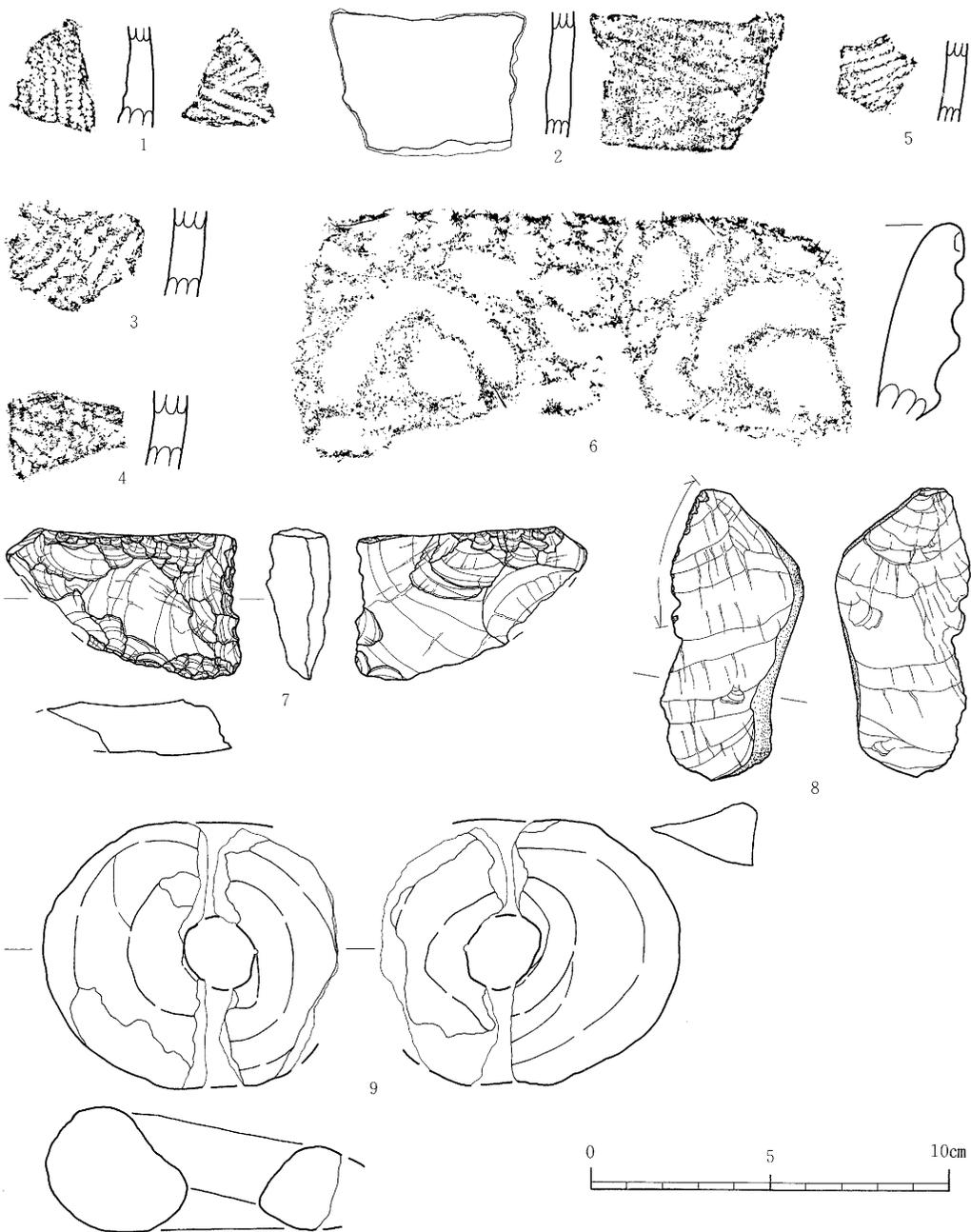
基本層から縄文土器・石器・石製品が若干出土している。

**縄文土器**：2～4層から13点出土した。その内、図示できたのは7点である。1～3は3層出土したものである。1は外面には縄文、内面には貝殻条痕文が施されており、胎土には植物繊維が多く含まれている。2は外面は無文で、内面にはわずかに貝殻条痕文が認められる。これら1・2は特徴から早期末ごろに位置付けられる。3は外面に縄文が施文されており、胎土には植物繊維が多く含まれている。早期末から前期初頭ごろのものと考えられる。4～6は4層出土のものである。4は3と同じく、外面に縄文が施文され、胎土には植物繊維を含むものである。早期末から前期初頭ごろと考えられる。5は外面に縄文が施文されている。時期は不明である。6は口縁部破片で、わずかに肥厚している。外面は端部には竹管による連続刺突文が施され、その下方には弧状沈線が交互に、また、円形刺突文もそれぞれ配されている。類似する土器は北前遺跡の第1次調査でも出土されており、前期末の大木6式に比定されている。

**石器**：17点出土している。その内、7・8は4層から出土している。7は剝片石器である。横長の剝片の、主に背面縁辺に比較的急角度の二次加工が施されている。8は微細剝離痕のある剝片である。縦長の剝片の側縁一部に微細剝離痕が認められる。9は環状石製品である。5層上部から出土しているが、付近には木の根による乱れが深くまで及んでいたことから上層に伴った可能性も考えられる。径が約7 cmの円盤状の中央に径2 cm程の孔を設け、ドーナツの形状に作り出しているものである。石材は砂岩で、保存状態は極めて悪い。その他の11点(写真13-17と下写真)と4点(写真13-18)はそれぞれ同一母岩のものと考えられる。石材は前者が碧玉、後者が砂岩である。特に前者は石核と剝片10点から成り、その内6点にはそれぞれ2点ずつの接合関係が認められた(下写真)。



接合資料の写真



番号	種類	出土層位	特徴
1	縄文土器 深鉢	基 3 層	外面はLR縄文。内面は貝殻条痕文。胎土に植物繊維を多く含む。
2	縄文土器 深鉢	〃	外面は無文(荒いミガキ)。内面は貝殻条痕文。植物繊維は含まない。
3	縄文土器 深鉢	〃	外面は無節(L)か。胎土に植物繊維を多く含む。
4	縄文土器 深鉢	基 4 層	外面はLR縄文。胎土に植物繊維を多く含む。
5	縄文土器 深鉢	〃	外面はLR縄文。内面は調整がミガキ。
6	縄文土器 深鉢	〃	口縁部。外面は竹管による刺突文と上下から交互の弧状沈線と円形刺突文。一部欠損。横長の剥片を素材とし、主に背面の周縁に二次加工が施されている。長さ64mm 幅41mm 厚さ16.3mm 石材-珪質頁岩。
7	石器 (剥片石器)	〃	縦長の剥片で、自然面を残している。側縁の一部に微細剝離痕が認められる。長さ80mm 幅36mm 厚さ16.6mm 石材-石英安山岩。
8	石器 (微細剝離痕のある剥片)	〃	保存が悪く、欠損部分が多い。形状は円形でドーナツ形をなす。長さ(径)70mm 孔径(20mm) 厚さ35mm 石材-砂岩。
9	環状石製品	基 5 層 上部	

第10図 出土遺物 (2)

## VII. ま と め

1. 今回の調査箇所は北前遺跡ではやや東寄りに、杉土手では全長の南西端にあたり、名取川が形成した段丘上に立地する。

2. 今回の杉土手部分は保存状況が極めて良好で、70mの長さにわたって土塁状の高まりが続いている。調査では第1次調査と同様に今回も積み土に大きく3ヶ所の積み手の違いが認められ、構築後に少なくとも2回の修復が行われていることが確認された。また、最初の構築時(I期)には特に北側において基準線とも考えられるような直線的な掘り込みが行われており、極めて企画的な方法により構築されていることがうかがわれた。なお、杉土手に伴う遺物は確認されず、構築時期についての新しい知見は得られなかった。

3. 杉土手下層の調査では、北前遺跡第1次調査とほぼ同様の基本層序が確認された。基本層では遺構は検出されなかったが、2～4層からは縄文土器・石器が、5層上部からは石製品が出土している。前者では縄文時代早期末・早期末から前期初頭・前期末の土器が認められているが、層位的な出土状況は示していない。後者の環状石製品は出土層位にやや不明確なところがあるが、5層出土とすると旧石器時代に属する可能性が考えられるものである。旧石器時代の類例を求めると、県内では色麻町大原B遺跡、同じく大原D遺跡から出土している「石製有孔円板」と呼称されているものがある(山田他:1990)。これらは大きさが5cmから6cm前後で、やや扁平な円盤状を呈しており、その中央には1cm未満の孔が穿たれている。石材は砂岩と凝灰岩である。2例とも晩期旧石器時代の数少ない資料として注目されている。本例はこれらとは大きさや形状などでやや違いが認められるものの、大まかには似かよった特徴を有している。今後の類似資料を待ちたい。

### 引用・参考文献

- 及川 格他 (1985):「山田上ノ台遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第77集  
小川淳一他 (1987):「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第105集  
斎藤・佐々木 (1983):「御堂平遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第97集  
佐藤 洋他 (1982):「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第36集  
主浜光朗他 (1987):「山田上ノ台遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第100集  
地団研仙台支部 (1980):「新編仙台の地学」  
中川久夫他 (1960):「仙台付近の第四系および地形(1)」『第四紀研究』第1巻第6号  
中川久夫他 (1961):「仙台付近の第四系および地形(2)」『第四紀研究』第2巻第1号  
中田・大槻・今泉 (1976):「仙台平野西縁・長町-利府線に沿う新規地殻変動」『東北地理』第28巻第2号  
山田晃弘他 (1990):「古川市馬場壇B遺跡・色麻町大原B遺跡」『東北歴史資料館資料集』29  
渡部 紀 (1989):「北前遺跡-第3次調査」『仙台市文化財調査報告書』第129集



写真1  
杉土手近景  
(西から)



写真2  
杉土手近景  
(東から)



写真3  
調査地点の杉土手  
(東から)

写真4  
杉土手斜面  
(南西から)



写真5  
杉土手斜面  
(北西から)



写真6  
杉土手基底面の状況  
(東から)





写真7  
杉土手積み土の断面—中央  
(東から)



写真8  
杉土手積み土の断面—北側  
(東から)

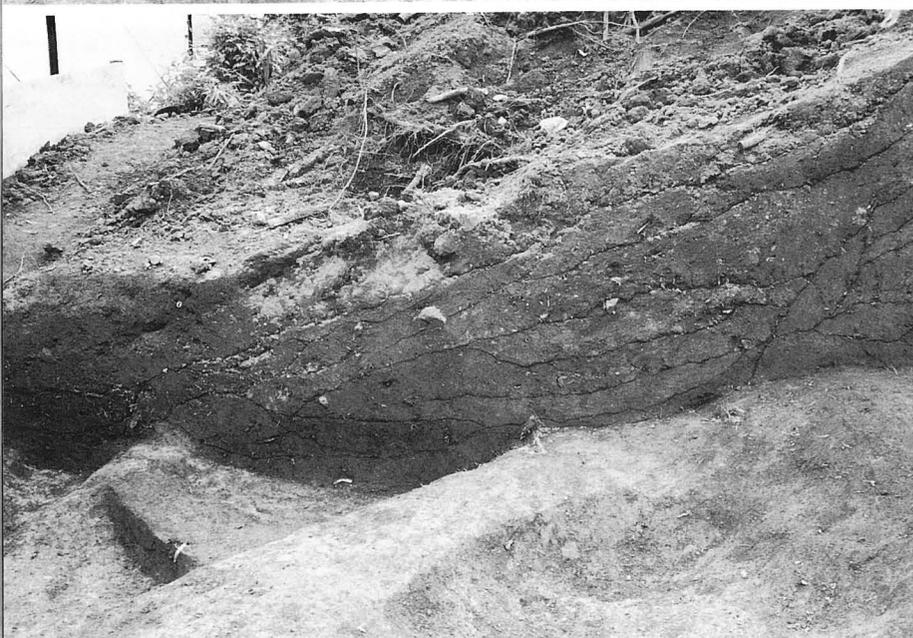


写真9  
杉土手積み土の断面—南側  
(東から)

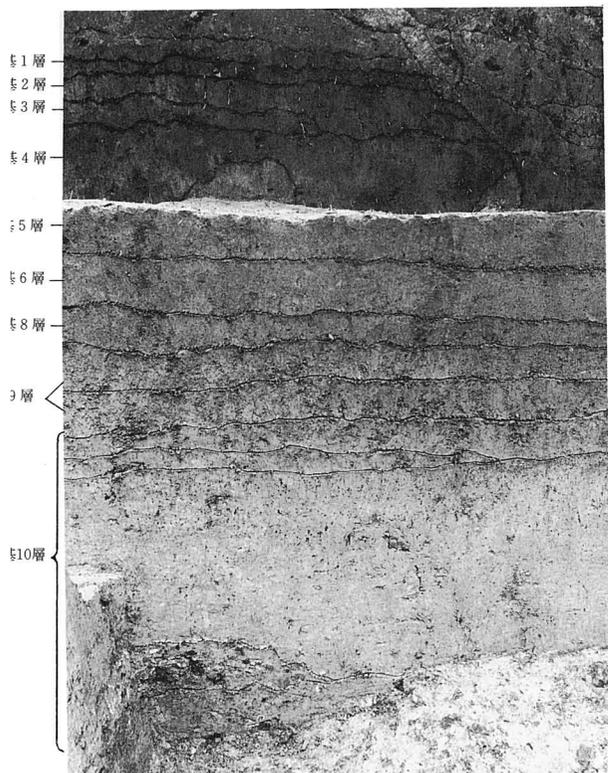


写真10 基本層序 (西壁)



写真11 環状石製品出土状況

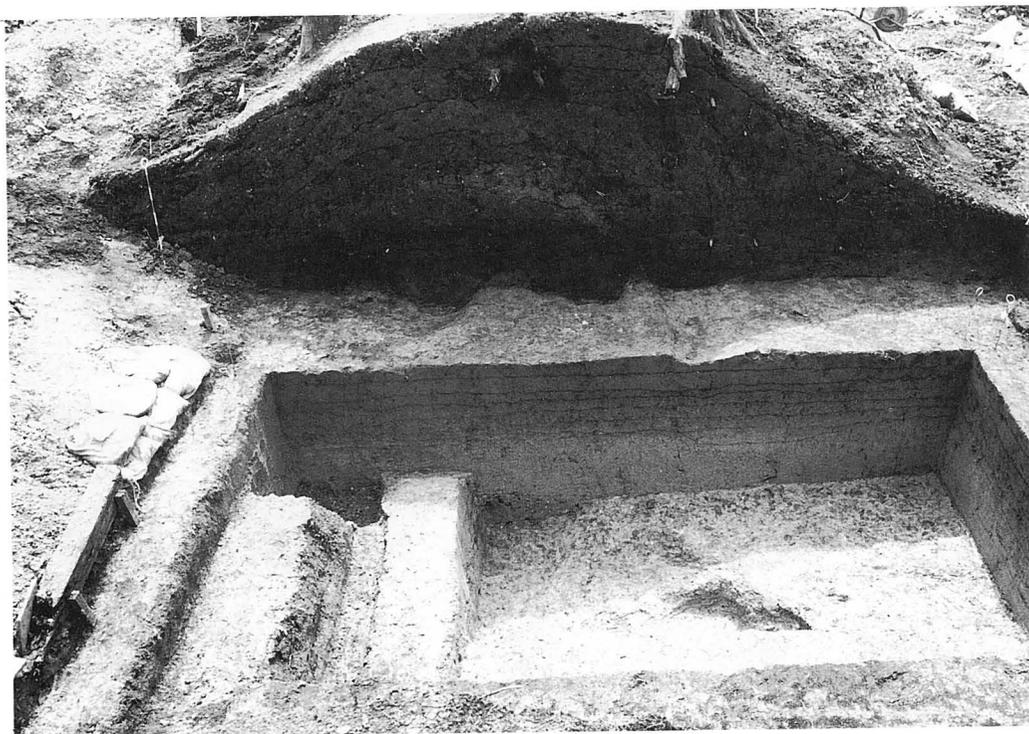


写真12 完掘状況 (東から)

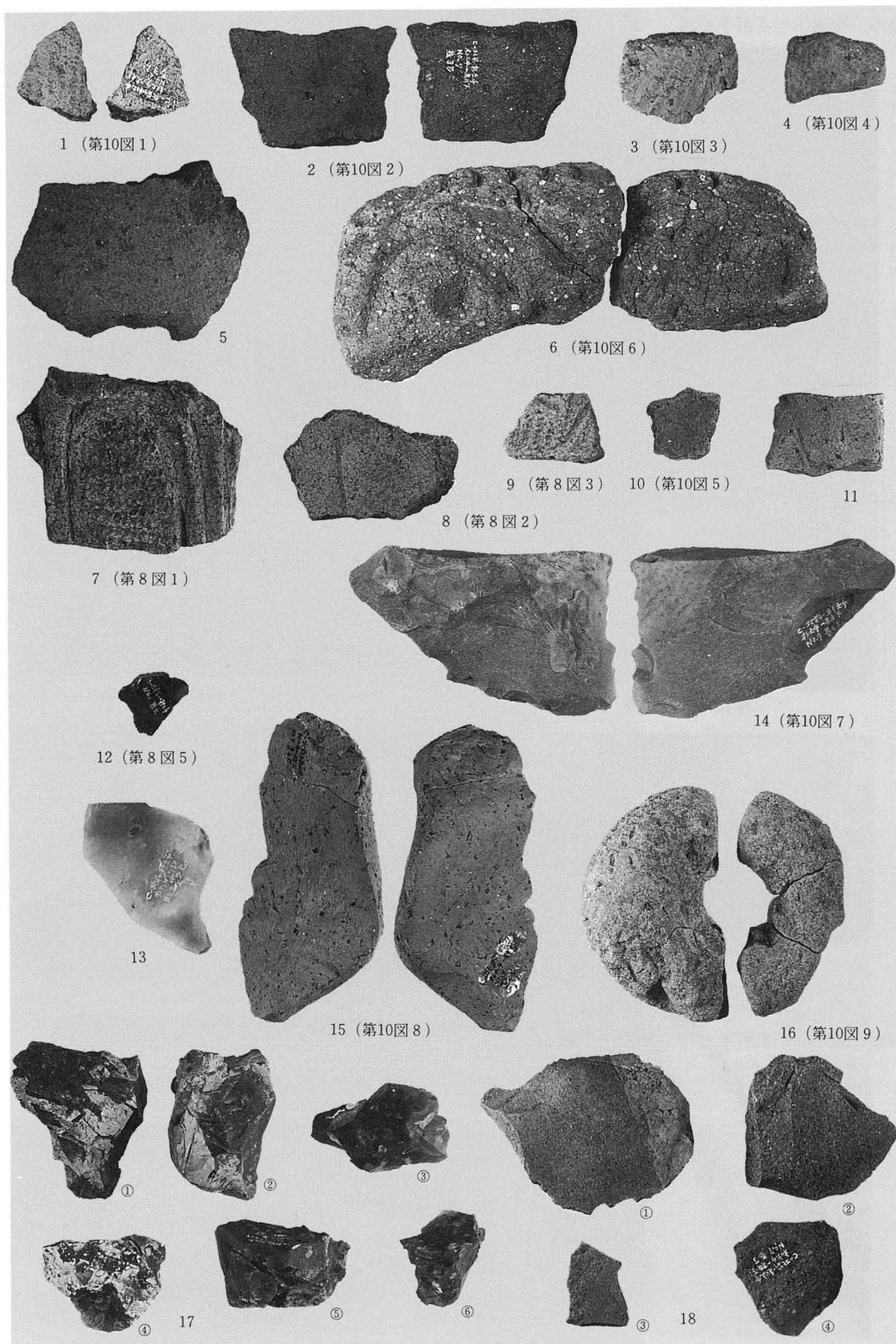


写真13 出土遺物

## 文化財課職員

課長 早坂春一		
管理係	調査第一係	
係長 鴫田義幸	係長 加藤正範	主事 大江美智代
主事 白幡靖子	主任 熊谷幹男	教諭 熊谷裕行
〃 佐藤正幸	教諭 佐藤好一	
〃 高橋三也	主任 篠原信彦	調査第二係
〃 庄司 厚	〃 木村浩二	係長 田中則和
	主事 佐藤 洋	教諭 太田昭夫
	〃 吉岡恭平	主事 金森安孝
	教諭 小川淳一	〃 佐藤甲二
	主事 主浜光朗	〃 渡部弘美
	〃 長島栄一	〃 工藤哲司
	教諭 神成浩志	〃 斎野裕彦
	〃 高倉祐一	〃 工藤信一郎
	〃 稲葉俊一	〃 荒井 格
	〃 菅原裕樹	〃 中富 洋
	主事 佐藤 淳	〃 平間亮輔
	〃 渡部 紀	教諭 五十嵐康洋
		〃 川名秀一

仙台市文化財調査報告書第157集

平成3年度

### 杉土手・北前遺跡

——杉土手(2次)・北前遺跡(4次)  
発掘調査報告書——

1992年3月

発行 沼田達雄

仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1  
仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株)東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

